

横浜市民ギャラリー

あざみ野

アート⁺認知症
やさしい美術鑑賞
プログラム

アート+認知症 やさしい美術鑑賞プログラム

2022.4→2025.3 報告書

目 次

- | 02 | はじめに
- | 03 | 青葉区の地域性
「アート+認知症 やさしい美術鑑賞プログラム」の立ち上げ
- | 04 | プログラムの目的と概要
- | 06 | 2022 年度のプログラム
- | 12 | 2023 年度のプログラム
- | 17 | 2024 年度のプログラム
- | 26 | 連携施設スタッフの声
横浜市荏田地域ケアプラザ 和久井聡子（社会福祉士）
GrASP株式会社 定政香織（作業療法士）
- | 27 | 広報と参加者募集について
- | 28 | 「やさしい美術鑑賞一易しさと優しさ。その先にあるもの一」
三ツ木紀英（NPO法人 芸術資源開発機構 代表理事）
- | 29 | 「認知症の方とその家族のQOLを高めるアート活動を推進する動きとは？」
稲庭彩和子（独立行政法人国立美術館 国立アートリサーチセンター 主任研究員）
- | 30 | 「選択肢をつくり、成熟を促すプログラム」
北川裕介（エドューケーター／学芸員、横浜市民ギャラリーあざみ野）

はじめに

歳を重ねるとは、どのようなことなのでしょう。物忘れや体力の衰えなど、年齢が上がることで直面する変化は様々あります。とりわけ、2025年には日本人の高齢者の5人に1人になると予測されている認知症は、私たちにとって非常に身近な課題となっています。かつて美術家の赤瀬川原平は「老人力」という言葉を提唱し、老いを肯定的に捉える視点を示しました。「できないこと」に注目するのではなく、認知症になっても「できること」や「楽しめること」に目を向け、さまざまな世代が共に生活を豊かにしていく道を模索することが、今の社会に必要なことだと考えます。

横浜市民ギャラリーあざみ野では、社会的な課題や地域のニーズに応えるべく、2022年度より「アート+認知症 やさしい美術鑑賞プログラム」*を立ち上げました。このプログラムは、高齢化が進む中で、美術館が認知症を含む高齢者を対象とする取り組みを積極的に行う意義について考え、実践を通じてその可能性を探る試みです。国内の美術館における認知症の方々を対象とした事業は、まだ発展段階にあると言えます。このプログラムでの試行錯誤が足がかりとなり、高齢者や認知症の方を対象とした取り組みが全国に広がることを願い報告書を作成しました。

最後に、本プログラムにご尽力いただいた講師の皆さま、連携施設の皆さま、参加者および本プログラムにご協力くださったすべての皆さまに心から感謝を申し上げます。

*2022年度は「見ル 聞ク 感ジル みんなの対話型鑑賞会」という名称で実施

青葉区の地域性

横浜市民ギャラリーあざみ野がある横浜市青葉区は、1950年代以降に大規模開発によって徐々に整備された郊外の住宅地、いわゆるニュータウンです。豊かな自然と充実したインフラが共存する地域で、病院も多く点在します。市民の健康意識も高いことから、厚生労働省が公表している市区町村別の平均寿命の調査で、2007年と2015年には男性の平均寿命が全国トップに位置づけられたこともありました。

一方で、住民の高齢化が進む中、平均寿命だけでなく、健康寿命をいかに延ばすかが重要な課題となっています。また、地域として高齢者や認知症の方々をどのように見守り、受け入れるかという問題にも直面しています。

こうした課題を背景に、あざみ野商店会をはじめとした地域の多様なメンバーが協力し、2021年に「やさしい街あざみ野実行委員会」が立ち上げられました。同委員会により認知症に関する調査や知識の普及、また世代を超えた交流イベントを行う「認知症の人にやさしい街プロジェクト」が展開されています。横浜市民ギャラリーあざみ野も、定例の実行委員会に出席し、地域の課題について共に考えてきました。

「アート+認知症 やさしい美術鑑賞プログラム」の立ち上げ

横浜市民ギャラリーあざみ野は、2005年に複合文化施設であるアートフォーラムあざみ野内に開館した公設ギャラリーです。展示や教育普及活動等を通じて地域の文化拠点としての役割を果たしてきました。利用者には活動的で元気な高齢者も多く見受けられますが、一方で「来たい」と思いながらも物理的・心理的な理由で来館が難しい方もいらっしゃいます。そのような潜在的利用者に対しても、公共施設として何かできることはないかと日々考え実践しています。

あらゆる人がアートを楽しめる機会をつくりたいという想いと、認知症に関する支援の土壌が地域にすでにあったことから、「やさしい街あざみ野実行委員会」や近隣の福祉施設に協力を仰ぎ、2022年度に「アート+認知症 やさしい美術鑑賞プログラム」をスタートさせることにしました。

プログラムの目的と概要

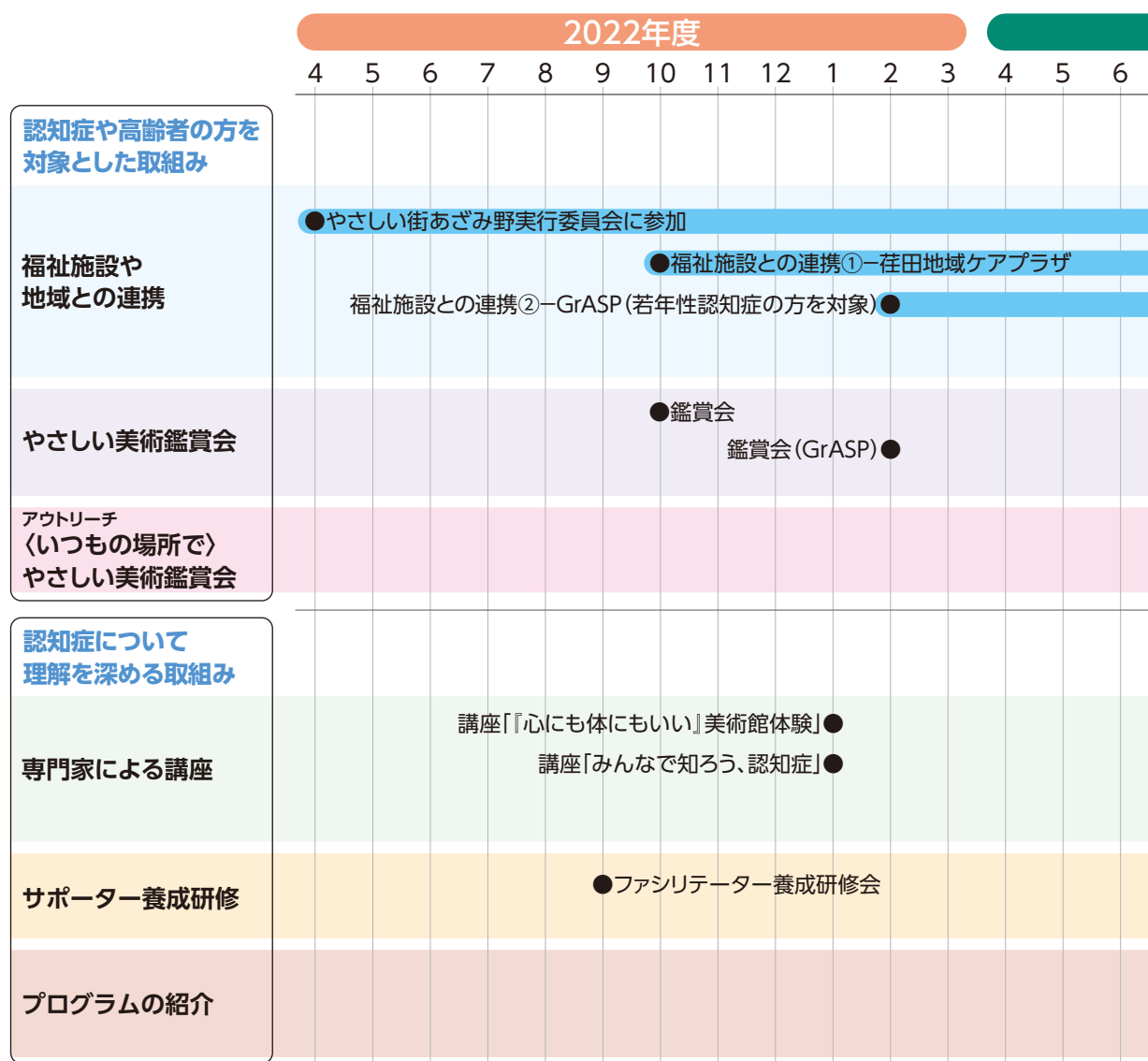
「アート+認知症 やさしい美術鑑賞プログラム」は、①やさしい美術鑑賞会、②サポーター養成研修、③専門家による講座、の3つを軸に構成しています。これらのプログラムを行なうことによって、高齢者や認知症について知り、学び合う機会をつくり、年齢や病気に関わらずあらゆる方々に「作品鑑賞を楽しむ」という選択肢を提供することを目的としています。

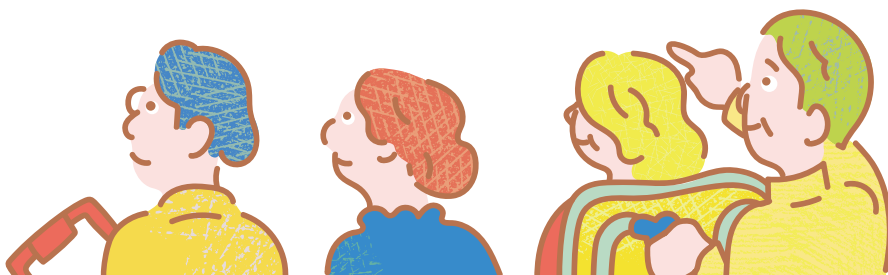
①やさしい美術鑑賞会

高齢者・認知症の方とご家族や介護者が安心して過ごすことができる美術鑑賞会。福祉施設と連携しながら、横浜市民ギャラリーあざみ野を会場に実施。

②サポーター養成研修

①の「やさしい美術鑑賞会」でファシリテーターやサポーターを担っていただくために、基礎的な対話型鑑賞の理論や、認知症の方と鑑賞する際のポイントについて学ぶ研修。





③専門家による講座

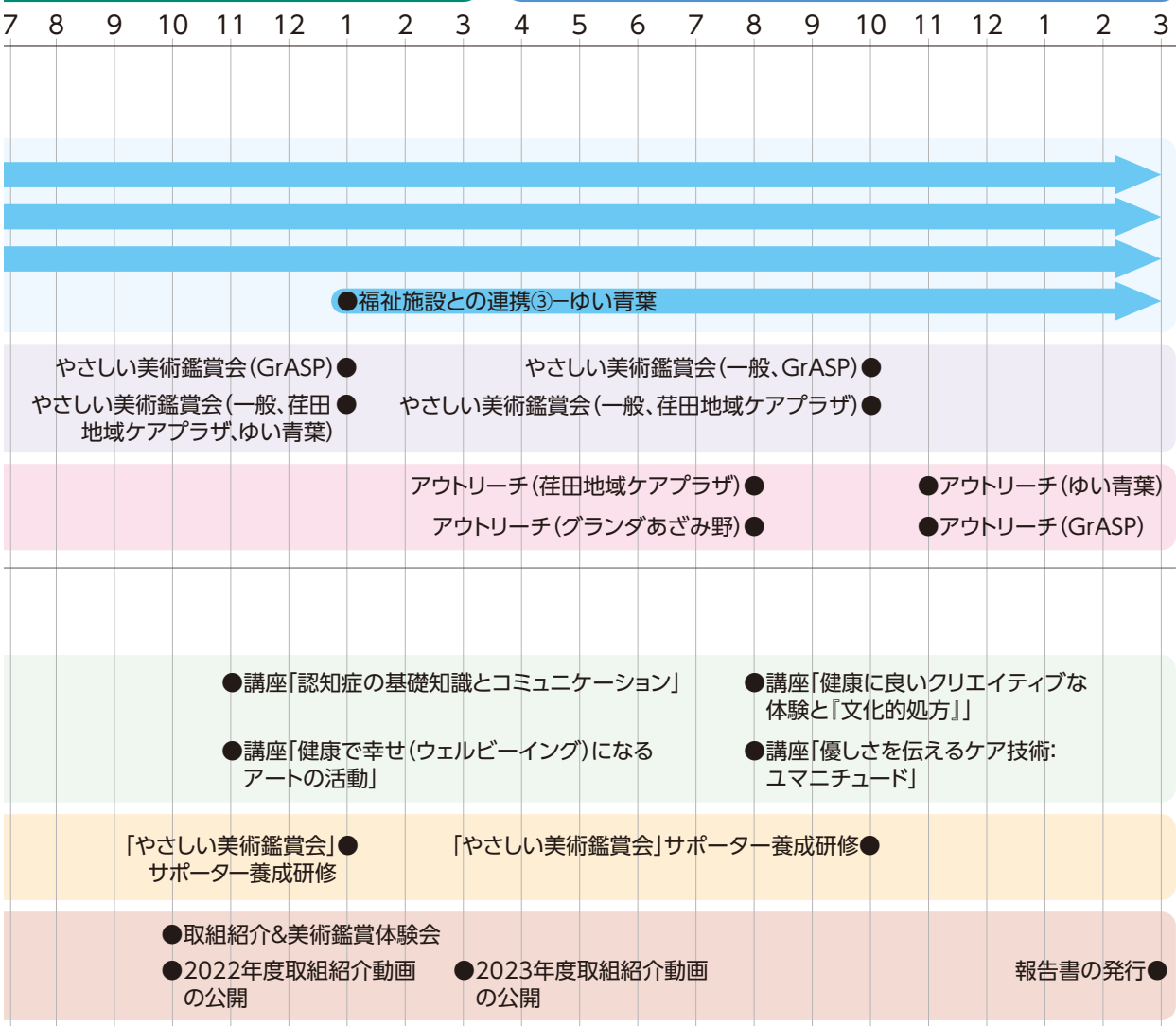
医療・福祉・美術の専門家を招き、高齢者や認知症について理解を深めたり、アートと認知症の関係を知るための講座。

その他 年度ごとの取り組み

- 2023年度
取組紹介&美術鑑賞体験会、取組紹介動画の公開
- 2024年度
アウトリーチ、報告書の発行

2023年度

2024年度



2022 年度のプログラム

- 専門家による講座

「『心にも体にもいい』美術館体験」

「みんなで知ろう、認知症」

- ファシリテーター養成研修会

- 見ル 聞ク 感ジル みんなの対話型鑑賞会

みんなで見るから、たのしいし、うれしい。



専門家による講座

「いくつかになっても楽しめるアートを考える

～高齢者・認知症の方とご家族のための、心にも体にもいいCreative Ageing～

クリエイティブ エイジング



講座①「心にも体にもいい」美術館体験

日 時 | 2023年1月8日(日) 14:00～16:00

場 所 | 横浜市民ギャラリーあざみ野 アトリエ

講 師 | 稲庭彩和子

(独立行政法人国立美術館 国立美術館本部 主任研究員)
※肩書きは当時のもの

参加者 | 34名

文化施設と介護の接点

「美術館は高齢者の健康度や幸福度向上に効果がある」ということについて、近年、世界各地で盛んに研究が行われるようになりました。高齢者や認知症の当事者と家族に向けた、アートを介したコミュニケーション活動が数多く行われているイギリスの美術館の事例紹介と、日本の美術館での可能性についてお聞きしました。

＼ 参加者の声 /

「高齢化社会に向けたwell-beingを考えると、美術館にとっても、高齢者やその家族にとっても、国にとっても、幸せになれる仕組みだと思いました。」
「認知症に対する知識と、アートとのかかわり、療法など。いろいろと視野が広がりました。」



講座②みんなで知ろう、認知症

日 時 | 2023年1月9日(月・祝) 10:00～12:00

場 所 | 横浜市民ギャラリーあざみ野 アトリエ

講 師 | 大迫正行(おおさこ心のクリニック院長)

横浜市荏田地域ケアプラザスタッフ

参加者 | 22名

まずは認知症について正しく知ることから

だれにでも起こりうる脳の病気、認知症。ご家族に「もしかして…」という症状が出ていても、なかなか判断がつきにくいものです。前半は医師から認知症の基礎知識を。後半は横浜市荏田地域ケアプラザによる『認知症サポーター養成講座』から、認知症の方と接するときの心がまえを学びました。

Topics

認知症サポーター養成講座とは？

厚生労働省が推進している取り組みで、認知症について正しく理解し認知症の人や家族を温かく見守る応援者を、全国で養成している。

ファシリテーター養成研修会

*2023年度以降は「サポーター養成研修」に名称を変更



日 時 | 2022年9月1日(木)、9日(金)、10月14日(金) 全3回

場 所 | 横浜市民ギャラリーあざみ野 アトリエ、展示室

講 師 | 三ツ木紀英(アート・エデュケーター、NPO ARDA 代表理事)

桑原和美(アーツ×ダイアログ コーディネータ、NPO ARDA 理事)

進 行 | 三ツ木紀英、桑原和美、岡崎智美(横浜市民ギャラリーあざみ野エデュケーター※現 横浜美術館)

対 象 | 財団職員*1、福祉関係者など

参加者 | 22名

アートを通じたコミュニケーション、高齢者と鑑賞を楽しむための準備

「見ル 聞ク 感ジル みんなの対話型鑑賞会」に向けて、ファシリテーターを養成する講座を実施しました。全3日間のプログラムで、レクチャーや実践を通じて対話型鑑賞の基礎を学びました。初年度は財団職員や福祉施設の職員に声をかけ、参加者を募りました。

研修内容

1日目 10:00～ 15:30	●趣旨説明、対話型鑑賞のレクチャー ●講師によるデモンストレーション① 鑑賞者や観察者(ファシリテーターと鑑賞者のやり取りを客観的に観察)を体験することでどのような事が鑑賞中に起こっているのかを捉える ●実践① 複数のチームに分かれて1人1回ファシリテーターを経験
2日目 13:00～ 16:45	●1日目の振り返り、先行事例の紹介 ●講師によるデモンストレーション② ●実践②
3日目 13:00～ 16:45	●プログラムの作り方と作品選びについて説明 ●グループワーク 作品選び・研究、ルートづくり ●リハーサルと振り返り ファシリテーターと鑑賞者役に分かれて実施



Topics

対話型鑑賞とは？

ファシリテーターが進行役となり、複数の鑑賞者が作品を見て感じたことや考えたことを共有し、対話を通じて新たな視点や発見を得る鑑賞手法。本事業では、特に「コミュニケーション」を重視した。

どんな人が参加したの？(2022-2024)

- ・一般募集した市民：介護をしている、対話型鑑賞を学んでいる等、さまざまな方
- ・福祉施設等の職員：スペースナナ、GrASP株式会社、横浜市荏田地域ケアプラザ
- ・*1財団職員：横浜市民ギャラリーあざみ野のほか、横浜美術館、横浜能楽堂、横浜にぎわい座、横浜市磯子区民文化センター杉田劇場等を管理運営する横浜市芸術文化振興財団の職員

見ル 聞ク 感ジル みんなの対話型鑑賞会

*2023年度以降は「やさしい美術鑑賞会」に名称を変更



日 時 | 2022年10月28日(金)
場 所 | 横浜市民ギャラリーあざみ野 アトリエ、展示室
対 象 | 高齢者の方とご家族
共催・運営補助 | 横浜市荏田地域ケアプラザ
進 行 | 岡崎智美
アドバイザー | 三ツ木紀英、桑原和美
参加者 | 5組10名(うち認知症軽度～中程度の方3名)
横浜市民荏田地域ケアプラザスタッフ4名
ファシリテーター6名(ファシリテーター養成研修会参加者)

非日常の空間で作品鑑賞

展示会の作品を中心に、認知症の方を含む高齢者とご家族を対象とした鑑賞会を実施しました。「最近美術館に行けなくなった」と話す不安げな表情の参加者が、展示室の前に立った瞬間に顔をパッと輝かせる様子が印象的でした。グループ内にファシリテーターと観察者、記録者を配置し、終了後に共有と振り返りを行いました。

タイムスケジュール

13:00	開始、アイスブレイク 作品カードをつかって自己紹介
13:20	展示室散歩 展示室へ移動し、おしゃべりしながら1周まわる
13:30	対話型鑑賞 展示室内の作品3点をみんなで鑑賞
14:20	お茶タイム アトリエに戻りお茶を飲みながらおしゃべり
15:00	終了、スタッフ振り返り

／ 参加者の声 ／

「自分は思ったことを言葉にするのが難しい。みんなが自分の思ったことを言葉にしてくれるのを聞くと嬉しくなる。みんなで見るから、たのしいし、うれしい。」

Topics

グループ分けの工夫

参加者の欠席など予期せぬ状況にも対応できるよう、いくつかのパターンを準備して実施している。今回の鑑賞会は2グループに分け、参加者4～5名に対してファシリテーター3名を配置した。参加者の特性や参加可能なファシリテーターの人数に応じて、1グループの人数構成は毎回異なるため、柔軟な対応が求められる。

鑑賞した展覧会

あざみ野コンテンポラリーvol.13
「CLOTH×OVER 糸と布 日常と生を織る」

糸や布を素材に「縫う」「織る」などの手法で制作するアーティスト(遠藤薫、小林万里子、ユ・ソラ)の作品を紹介した展覧会。



会場風景



日 時 | 2023年2月22日(水)
 場 所 | 横浜市民ギャラリーあざみ野 アトリエ、展示室他
 対 象 | 認知症の方とご家族(GrASP aoba横浜北部 利用者)
 進 行 | 岡崎智美
 参加者 | 認知症軽度の方9名、
 認知症中～重程度の方7名、ご家族1名
 GrASP施設スタッフ9名
 ファシリテーター11名(ファシリテーター養成研修会参加者)

認知症の方それぞれの状態に合わせたプログラムの工夫

この回では、若年性認知症の通所施設を利用する方が施設のスタッフと来館しました。軽度から重程度まで症状の幅に合わせてグループ分けを行いました。軽度の方には対話型鑑賞を中心にして、中～重程度の方には展示室内の散歩をメインに構成しました。事前に施設スタッフと展覧会を下見したうえで作品を選定するなど、参加者一人ひとりの状況に寄り添い環境を整えることで、鑑賞体験がより充実するよう工夫を重ねました。

タイムスケジュール

10:00	開始、アイスブレイク
10:20	展示室散歩
10:40	対話型鑑賞
11:10	お茶タイム
11:30	終了、スタッフ振り返り

※認知症中～重程度の方のグループは、対話型鑑賞を行わず展示室散歩の時間を長めにとり、グループによっては早めに終了しました。

＼参加者の声／

「みんなで出かけることのワクワク感。非日常のアートを味わうことでの心地よい疲労感」(福祉施設担当者)

Topics

アイスブレイクについて

鑑賞会開始までの時間、早めに集まった参加者とテーブルの上に並べられた作品図版(ジャンルやモチーフが異なる6～7点)を使ってコミュニケーションを図った。アイスブレイクでは、その作品の中から気になった1点を選び、「なぜその作品が気になったのか」「氏名」「住んでいる場所」等の自己紹介をグループ全員で行った。

鑑賞した展覧会

あざみ野フォト・アニュアル2023「潮田登久子 写真展 永遠のレッスン」+「横浜市所蔵カメラ・写真コレクション展 写真をめぐる距離」

横浜市民ギャラリーあざみ野のシリーズ展「あざみ野フォト・アニュアル」では、写真表現の現在を切り取る企画展と横浜市所蔵カメラ・写真コレクション展を同時開催している。

2023 年度のプログラム

- 取組紹介&美術鑑賞体験会
- 専門家による講座
 - 「認知症の基礎知識とコミュニケーション」
 - 「健康で幸せ(ウェルビーイング)になるアートの活動」
- 「やさしい美術鑑賞会」サポーター養成研修
- やさしい美術鑑賞会

サポートする／されるではない関係ができていた。



取組紹介&美術鑑賞体験会



日 時 | 2023年10月25日(水)、29日(日) ※両日とも同内容

場 所 | 横浜市民ギャラリーあざみ野 アトリエ、展示室

進 行 | 北川裕介

対 象 | 福祉医療関係者、高齢者・認知症の方とお出かけを検討されている方等

参加者 | 15名

アート+認知症の取り組みを 知っていただくために

当事者とのつなぎ手となる方々を対象とした講座を開催しました。事業の目的や概要を紹介するとともに、作品を鑑賞する楽しさを実際に体験してもらうことで、認知症の方を対象とした事業への理解や共感を広げる機会になりました。

タイムスケジュール (10/25)

10:30	開始、アイスブレイク、趣旨説明、対話型鑑賞の説明
11:20	展示室で作品鑑賞(2作品)
11:45	施設案内
11:55	2023年度取組案内
12:00	終了、片付け

＼参加者の声／

「実母の認知症軽減の実践から、対話型鑑賞の重要性、有効性は、理解しています。介護する人される人が共に楽しく、それが介護者にとっても心安らかであることを広く知っていただく取り組みとして、とても参考になりました。地域に広げていく模索をしてみたいと思います。」

Topics

鑑賞した展覧会

あざみ野コンテンポラリー
vol.14 「長谷川繁 1989-」

画家・長谷川繁の個展。未発表作品を含むドイツやオランダ滞在期の貴重な作品や最近作を展示。



《楽奇異庶虎羅無武流麗ちゃん》
長谷川繁

専門家による講座



認知症の基礎知識とコミュニケーション

日 時 | 2023年11月4日(土) 10:00～11:30
場 所 | 横浜市民ギャラリーあざみ野 アトリエ
講 師 | 上野優美(横浜市立みなと赤十字病院 看護師長)
参加者 | 24名

「認知症の方もみんな不安を抱えている」

現場での経験豊富な上野優美氏が、認知症についての基礎と認知症の方と接するときのポイントについて話しました。ご家族だけでなく認知症の方自身も不安を抱えていることに理解を示し、もし自分がそうになったらと当事者の気持ちを推し量ることがケアにおいて重要なことだと学びました。

＼参加者の声／

「認知症の人との接し方や、どういう状態なのか知る、否定しないことが大事なんだと分かりました。」
「人とかかわりが大切なことを、今回の講演で感じました。」



健康で幸せ(ウェルビーイング)になるアートの活動

日 時 | 2023年11月12日(日) 13:30～15:30
場 所 | 横浜市民ギャラリーあざみ野 アトリエ
講 師 | 稲庭彩和子
(独立行政法人国立美術館 国立アートリサーチセンター 主任研究員)
参加者 | 24名

「すべてのパブリックや組織が協力してシステムを変えなければならない」

医療領域だけでは解決できない多様な課題に対し、社会全体が協力し支え合う必要性について学びました。また、健康で幸せ(ウェルビーイング)になるアートの活動とはどのようなものなのか、国内外の事例を聞き、アートと認知症の関係性について理解を深めました。

Topics

ウェルビーイングとは？

身体的・精神的・社会的に良好な状態を指し、単なる健康や幸福を超えた概念。自己実現や他者とのつながりを大切にし、持続可能な生活や社会の在り方を目指す考え方として近年注目されている。

「やさしい美術鑑賞会」サポーター養成研修



日 時 | 2024年1月12日(金)、16日(火)、17日(水)、
19日(金)全3回
※1月17日、19日については参加希望日を選択
場 所 | 横浜市民ギャラリーあざみ野 アトリエ、展示室
講 師 | 三ツ木紀英
(アート・エデュケーター、NPO ARDA 代表理事)
進 行 | 三ツ木紀英、北川裕介
対 象 | 一般募集、財団職員
参加者 | 17名

＼ 参加者の声 /

「丁寧な実践の多い研修を経て、ファシリテーションを実践させていただく機会は、貴重な学びの時間になりました。コミュニケーションのとりの学び、対話・鑑賞を一緒にたのしむ場の力、参加者の様子から、この活動が続くといいなと思いました。」

柔軟にサポートするための体制づくり

「やさしい美術鑑賞会」当日のサポーターを一般募集しました。鑑賞会では財団職員がファシリテーションを担当し、募集したサポーターは参加者のサポートや進行補助を担いました。鑑賞会に向け、2日間の研修で対話型鑑賞の基礎を学び、関わり方やサポートの工夫を検討。リハーサルを経て迎えた本番では、参加者がリラックスして鑑賞を楽しめるよう、場の雰囲気づくりや声かけを工夫しました。研修と実践を終えて、サポーター自身も対話を通じた鑑賞の魅力や、美術がもたらす多様な気づきを実感しました。

研修内容

1日目 10:00～15:30	●趣旨説明、対話型鑑賞の体験と理論のレクチャー ●講師によるデモンストレーション
2日目 9:30～12:00 ※ファシリテーターの みを対象とした研修	●鑑賞会参加者について情報共有 ●講師による鑑賞会デモンストレーション ●リハーサル
13:30～16:00	●高齢者との対話型鑑賞について説明 ●鑑賞会の体験、鑑賞会打合せ
3日目 1/17は10:00～13:00 1/19は13:00～16:00	●やさしい美術鑑賞会本番(サポート)

Topics

「ファシリテーター養成」から 「サポーター養成」に変更

ファシリテーターは進行を担当し、サポーターは進行の補助や参加者への気配りを主に行う。例えば、聴覚に不安のある方のサポートや、発言が伝わりにくい場合の橋渡し役をサポーターに担当してもらった。

やさしい美術鑑賞会



場 所 | 横浜市民ギャラリーあざみ野 アトリエ、展示室
共 催 | 1/17 GrASP株式会社、
1/19 横浜市荏田地域ケアプラザ
進 行 | 北川裕介

さまざまなジャンルの作品を鑑賞できるギャラリーの強み

2022年度と同じ内容に加えて、施設の建物そのものを楽しめるよう、散歩の時間を充実させました。今回は自主企画展が実施されていない時期でしたが、貸しギャラリーでは子どもたちが描いた作品が展示されており、微笑ましい雰囲気の中で鑑賞を楽しみました。また、アトリエでは長谷川繁の油彩画（ポスター印刷による複製）や当館所蔵のカメラを鑑賞し、さまざまなジャンルの作品・資料に触れる機会になりました。

1/17タイムスケジュール ※1/19もほぼ同内容

10:30	開始、アイスブレイク
10:50	館内散歩 アトリエで作品・資料鑑賞 ●《楽奇異席虎羅無武流麗ちゃん》長谷川繁 ●当館所蔵の二眼レフ・一眼レフカメラ
11:35	お茶タイム
12:00	終了、スタッフ振り返り

日 時 | 2024年1月17日(水) 10:30～12:00

対 象 | 高齢者・認知症の方、
そのご家族や介護者
(一般募集、GrASP aoba横浜北部利用者)

参加者 | 認知症軽度の方11名、認知症中～
重度の方6名、ご家族2名
GrASPスタッフ7名
ファシリテーター及びサポーター14名
(サポーター養成研修参加者)

日 時 | 2024年1月19日(金) 13:30～15:00

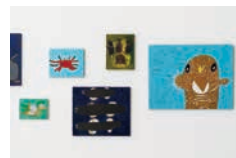
対 象 | 高齢者・認知症の方、
そのご家族や介護者
(一般募集、横浜市荏田地域ケアプラザ、ゆい青葉)

参加者 | 17名(うち一般申込1組2名)
横浜市荏田地域ケアプラザ、
ゆい青葉スタッフ5名
ファシリテーター及びサポーター14名
(サポーター養成研修参加者)

Topics

鑑賞した展覧会

『フェローアートギャラリー vol.51 牧島美帆展』
『第66回「明日への手」美術展 神奈川展』(主催:
芸術による教育の会)



「牧島美帆展」会場風景

2024 年度のプログラム

- 専門家による講座

「健康に良いクリエイティブな体験と『文化的処方』」

「優しさを伝えるケア技術：ユマニチュード」

- やさしい美術鑑賞会

- 「やさしい美術鑑賞会」 サポーター養成研修

- アウトリーチ 〈いつもの場所で〉やさしい美術鑑賞会

こういう機会があるから外に出れるし、
これがすごく楽しみでいい時間で、
2人にとってデートなんだ



専門家による講座



健康に良いクリエイティブな体験と「文化的処方」

日 時 | 2024年8月10日(土) 13:30～15:30
場 所 | 横浜市民ギャラリーあざみ野 アトリエ
講 師 | 稲庭彩和子
(独立行政法人国立美術館 国立アートリサーチセンター 主任研究員)
参加者 | 25名

「これからの新たな美術館の役割は、 つながりをどう作るかが重要」

アートを楽しむことによって、心が動くという体験が健康やウェルビーイングのために重要だという事を、国内外の事例や研究の紹介から学びました。また、公的な文化施設が福祉や医療と協力しあうことの必要性について理解を深めました。

＼ 参加者の声 /

「母が認知症になって、という方が多く参加されるのを知ってよかった。私だけかと思っていたのに安心した。」
「相手の存在を認めるユマニチュードのお話は、すごくためになりました。簡単そうに見えて、普段自分ではできていないことだと気づかされました。」



優しさを伝えるケア技術： ユマニチュード

日 時 | 2024年8月18日(日) 10:00～12:00
場 所 | 横浜市民ギャラリーあざみ野 アトリエ
講 師 | 本田美和子
(国立病院機構東京医療センター 総合内科医長)
イヴ・ジネスト(ジネスト・マレスコッティ研究所所長)
参加者 | 38名

「ユマニチュードの価値というのは 優しさと愛情」

ユマニチュードの技術について、開発者であるジネスト氏がワークを交えながら話しました。技術的な側面だけではなく「相手のことを大切に思う気持ち」を相手に伝わるように表現していくことの重要性を学びました。

Topics

ユマニチュードとは？

人間の尊厳を守るための根源的な哲学と、言語・非言語での多様なコミュニケーション技法に基づいた認知症についての実践的なケアメソッド。

やさしい美術鑑賞会



日時 | 2024年10月16日(水) 13:30～15:00

対象 | 高齢者・認知症の方、そのご家族や介護者
(一般募集、横浜市荏田地域ケアプラザ、ゆい青葉)

※感染症蔓延のため横浜市荏田地域ケアプラザとゆい青葉からの参加者は無し、ケアプラザのボランティアが参加者として鑑賞会に参加

参加者 | 13名(うち一般申込4組5名)

横浜市荏田地域ケアプラザスタッフ2名
ファシリテーター及びサポーター11名
(サポーター養成研修参加者)

場所 | 横浜市民ギャラリーあざみ野 アトリエ、展示室

共催 | 10/16 横浜市荏田地域ケアプラザ、10/23 GrASP株式会社

進行 | 北川裕介

タイムスケジュール(10/16)

※10/23もほぼ同内容

10:30	開始、アイスブレイク
10:50	展示室散歩 アトリエで作品鑑賞(2作品) ●《椿笑園の主達》中島清之 ●《神奈川子安町所見(八百屋の店)》石渡江逸
11:35	お茶タイム
12:00	終了、スタッフ振り返り

日時 | 2024年10月23日(水) 10:30～12:00

対象 | 高齢者・認知症の方とそのご家族、介護者
(一般募集、GrASP aoba横浜北部利用者)

参加者 | 認知症軽度の方12名、
認知症中～重度の方3名、ご家族1名、
一般申込3組4名
GrASPスタッフ6名
ファシリテーター及びサポーター9名
(サポーター養成研修参加者)

毎年参加してくださるリピーターの方も

施設内の散歩や作品鑑賞を組み合わせた前年度までの内容をほぼ踏襲して、鑑賞会を実施しました。展示室ではSHIMURAbrosの立体作品を鑑賞し、アトリエでは横浜美術館の収蔵作品(ポスター印刷による複製)を2点鑑賞しました。3年目の開催ということもあり、連携施設経由で参加される方だけでなく、一般の参加者も徐々に増えてきました。初年度から毎年楽しみにしてくださっているリピーターの方もいらっしゃいます。

Topics

鑑賞した展覧会

あざみ野コンテンポラリーvol.15「SHIMURAbros 雲をつかんで虹を見た」

映画をテーマに作品制作を行うSHIMURAbros(シムラブロス)の個展。

映像インスタレーションをはじめ、光学ガラスの彫刻や映画的空間を立体化する作品を展示。

《見かけの虹-悠久》
SHIMURAbros



「やさしい美術鑑賞会」サポーター養成研修



日 時 | 2024年10月2日(水)、9日(水)、16日(水)、23日(水) 全3回 ※10月16日、23日については参加希望日を選択
場 所 | 横浜市民ギャラリーあざみ野 アトリエ、展示室
講 師 | 三ツ木紀英(アート・エデュケーター、NPO ARDA 代表理事)
進 行 | 三ツ木紀英、北川裕介
対 象 | 一般募集、財団職員
参加者 | 23名

多様な人々が集い学び合う研修会

2023年度と概ね同じ研修内容に加えて、ARDAが関わる認知症の方に向けた対話型鑑賞の検証プロジェクトの事例紹介をしていただきました。初年度から共通する特徴として、参加者は多様な背景やスキルを持つ方々が集まっています。グループワークを多く取り入れることで鑑賞や高齢者に関して多角的に理解を深め、意見を出し合いながら、より良い鑑賞会を目指しました。

研修内容

1日目 10:00～15:30	●趣旨説明、対話型鑑賞の体験と理論のレクチャー ●講師によるデモンストレーション
2日目 9:30～12:00 ※ファシリテーターのみを 対象とした研修	●鑑賞会参加者について情報共有 ●講師による鑑賞会のデモンストレーション ●リハーサル
13:30～16:00	●やさしい美術鑑賞会について説明 ●リハーサル、プログラム改善のための案出し
3日目 10/16は13:00～16:00 10/23は10:00～13:00	●やさしい美術鑑賞会本番(サポート)



＼ サポーター養成研修 参加者のコメント /

吉村陽子さん

認知症の中程度の方と一緒に鑑賞をしました。展示室に入るのを嫌がられたので、館内を散策したりお話をしているうちにご自分で絵の前に進んでご覧になり、「楽しいものを見つけた」というように表情も明るくなりました。対話しながらの鑑賞は難しかったですが、自由に動いていただき会話をすることで、一緒に楽しみを見つけた気がしました。

發知言織さん(横浜美術館エデュケーター)

今回の研修では、認知症についての理解を深められたとともに、投げかけによって対話が深まる様子を直に感じ、学ぶことができました。対話を進めていく中で、参加者の間で「着物」の共通点がみつかり、会話が弾み、さらに解釈が広がっていく場面がありました。作品を媒介として言葉がつながり、意見がどんどん広がっていくことに驚かされました。サポーターの方々の協力のもと、和やかな雰囲気での鑑賞会を終えることができました。

Topics

お茶タイムについて

温かいお茶とお菓子を楽しみながら、クールダウンと同時に鑑賞会を振り返る時間を設けた。その際、記述式アンケートでは得られないような当事者の様子の変化やその時の気持ちを直接聞き取ることに留意した。また、介護者や施設職員にも積極的に話を伺い、感じたことや気づきを共有してもらえるよう心がけた。



アウトリーチ 〈いつもの場所で〉やさしい美術鑑賞会

2024年度は高齢者や認知症の方が慣れ親しんだ施設に出向き、鑑賞会を行いました。



いつもの場所だから参加でき、生まれる安心感
アウトリーチ形式で鑑賞会を行うことによって、ギャラリーでの鑑賞会に来るのが難しい方々にも参加してもらうことができました。馴染みの利用者の方同士で話したり笑ったりと、リラックスして鑑賞を楽しまれていました。

横浜市荏田地域ケアプラザ

日 時 | 2024年8月21日(水)

対象者 | デイサービス利用者

ファシリテーター | 北川裕介

参加者 | 18名

横浜市荏田地域ケアプラザスタッフ5名

横浜市民ギャラリーあざみ野スタッフ4名

タイムスケジュール

13:20	施設担当者と打合せ、会場準備
14:00	開始、あいさつ
14:05	作品鑑賞(2点) 《神奈川子安町所見(八百屋の店)》石渡江逸 《椿笑園の主達》中島清之 ●モニターに作品図版を映し出し、A3サイズにプリントした図版も配布 ●ファシリテーター以外のギャラリースタッフは、会話を聞き取るのが難しい方のサポートや、個別の発言を受け止めるなどの補助役を担った。
14:45	終了。ギャラリーに戻り、スタッフ振り返り

Topics

横浜市荏田地域ケアプラザ

地域ケアプラザは、高齢者、子ども、障害のある人など誰もが地域で安心して暮らせるよう、身近な福祉・保健の拠点として、さまざまな取り組みを行う横浜市独自の施設。横浜市社会福祉協議会が運営し、福祉・保健に関する相談を行うだけでなく、デイサービスや居宅介護支援事業も併設している。

鑑賞した作品

《神奈川子安町所見(八百屋の店)》石渡江逸

横浜美術館蔵

1931年に制作された木版画。いわゆる名所絵ではなく身近な場所を描いた作品であるため、参加者にとって親しみやすく、八百屋に売られている野菜についての話題で盛り上がりました。





リハビリホームグランダあざみ野

日 時 | 2024年8月23日(金)

対象者 | グランダあざみ野入居者

ファシリテーター | 北川裕介

参加者 | 19名

グランダあざみ野スタッフ3名

横浜市民ギャラリーあざみ野スタッフ4名

タイムスケジュール

13:20	施設担当者と打合せ、会場準備
14:00	開始、あいさつ
14:05	作品鑑賞(3点) 《神奈川子安町所見(八百屋の店)》石渡江逸 《椿笑園の主達》中島清之 《喝采》中島清之 ●ある程度作品を鑑賞した後に、ちあきなおみの『喝采』の動画を視聴
15:00	終了。ギャラリーに戻り、スタッフ振り返り

じっくり鑑賞することで見えてくる、豊かな表情

1時間かけて3作品を鑑賞しました。作品を観ることに慣れている方も多く、細部までじっくりと見入る姿が印象的でした。《椿笑園の主達》の鑑賞では、描かれた2人の仲睦まじい関係性にうっとりする場面もありました。《喝采》では、同時代に流行した歌を口ずさむ方もおり、楽しい時間を共有することができました。

Topics

リハビリホーム グランダあざみ野

住宅型有料老人ホーム。機能訓練指導員による個別のリハビリプログラムや、屋上庭園や多彩なアクティビティなど、一人ひとりが自由にゆったりと過ごせる環境づくりを特徴としている。

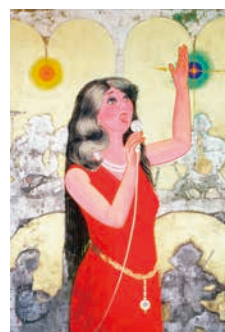
鑑賞した作品

《椿笑園の主達》《喝采》

中島清之

いずれも横浜美術館蔵
(中島清之氏寄贈)

中島清之は、日本画家として風景画や人物画を多く手掛け、70歳で青葉区恩田に居を構えた。地域にゆかりがあることから、鑑賞会の参加者に親しみを持って受け入れられた。《喝采》は、ちあきなおみの同タイトルの楽曲を題材にした作品。





鳥をテーマにした鑑賞と創作

鳥をモチーフとした作品を3点鑑賞した後、土粘土を使って鳥の形をつくるワークを行いました。鑑賞だけでなく創作の時間を設けることで、粘土に触れる心地よさを感じてもらい、飽きずに最後まで楽しんでいただけるよう工夫しました。同じ施設内で、通いの方と入居されている方を対象に、それぞれ鑑賞会を実施しました。

ゆい青葉(荏田)

日 時 | 2024年11月15日(金)

対象者 | 小規模多機能施設及びグループホーム利用者
ファシリテーター | 北川裕介

参加者 116名

ゆい青葉スタッフ3名

横浜市民ギャラリーあざみ野スタッフ3名

タイムスケジュール

13:10	施設担当者と打合せ、会場準備
13:30	開始、あいさつ 対象:小規模多機能施設の利用者
13:35	作品鑑賞(3点) 《婦女愛禽図》山村耕花 《カトレアと二羽のインコ》高間惣七 《鳥》イワナ・ショルツォヴァ
14:00	土粘土で鳥のかたちをつくる それぞれが思い浮かべる鳥のかたちをつくり、みんな で鑑賞
14:30	終了
14:45 15:45	グループホーム利用者を対象に同内容のプログラム を実施
15:45	終了。ギャラリーに戻り、スタッフ振り返り

Topics

ゆい青葉

小規模多機能型居宅介護（訪問・通所・宿泊）と認知症対応型共同生活介護（グループホーム）を併設した施設。家庭的な環境や住み慣れた地域の中で、利用者が自立した生活を送ることができるようサポートしている。

鑑賞した作品

《婦女愛禽図》山村耕花
横浜美術館蔵
(山村行輝氏寄贈)

二曲一雙の屏風に複数の女性が描かれた作品。よく見ると女性がさまざまな鳥を愛でている場面であることがわかる。描かれた人物や鳥の数を数えたり、鳥の種類を観察するなかで、参加者が昔飼っていた鳥のことや、施設の周囲で見られる鳥の話などに話題が広がっていった。





GrASP aoba横浜北部

日 時 | 2024年11月20日(水)

対象者 | GrASP aoba横浜北部利用者

ファシリテーター | 北川裕介

参加者 | 15名

GrASPスタッフ5名

横浜市民ギャラリーあざみ野スタッフ4名

タイムスケジュール

10:15	施設担当者と打合せ、会場準備
10:30	開始、あいさつ
10:35	作品鑑賞(3点) 《婦女愛禽図》山村耕花 《カトレアと二羽のインコ》高間惣七 《鳥》イワナ・ショルツォヴァ
11:00	土粘土で鳥のかたちをつくる それぞれが思い浮かべる鳥のかたちをつくり、みんなで鑑賞
11:30	終了。ギャラリーに戻り、スタッフ振り返り

認知症の進行度が異なる方々が 一緒に楽しむことができる時間

「やさしい美術鑑賞会」に参加したことがある方が多く、ギャラリーで鑑賞している時よりも落ち着いた雰囲気を感じました。土粘土のやさしさや冷たさを楽しみながら、集中して取り組まれている様子が多くの方に見られました。認知症の進行度が異なる人同士が一緒になって、鑑賞と創作を楽しみました。

Topics

GrASP aoba横浜北部

若年性認知症の支援に特化した青葉区の介護サービス事業所。認知症容態初期から後期まで一貫してサービスを提供。特に初期には、利用者が就労ボランティアを通じて社会貢献し、やりがいや達成感を得られるよう取り組んでいる。

鑑賞した作品

1《カトレアと二羽のインコ》高間惣七

2《鳥》イワナ・ショルツォヴァ

いずれも横浜美術館蔵
※1は高間米太郎氏寄贈

2作品とも良く見ると鳥だとわかる抽象的な表現。止まり木でくつろぐ様子や、今にも羽ばたこうとしている姿など、形に注目しながら鑑賞を行った。粘土制作の発想を広げることを意識して、鑑賞作品を選んだ。



1



2



連携施設スタッフの声

横浜市荏田地域ケアプラザ 和久井聡子(社会福祉士)

この取り組みは、横浜市民ギャラリーあざみ野様より、お声をいただき、2022年度から協力して実施しています。私たち荏田地域ケアプラザは、地域の身近な相談窓口として、福祉や介護等の相談を受けている施設です。高齢や認知症等により、外出の機会が減ってしまっているという現状がある中、ご本人にとっての新たな社会交流の場や刺激となる取り組みと考え、賛同致しました。

普段とは違うアートギャラリーという空間の中で、少しおしゃれをして、出かけられ、アートを通じて、いろいろな人と話す機会となり、素敵につながりの場となりました。参加者からは、「普段とは違う場所で楽しんで様子だった」「いつも家族とばかりだが、たくさんの方々と接し、いきいきしていた」という家族の声、「将来が広がったように感じ、楽しかった」とのご本人の声等いただきました。2年目には、近隣の施設グループホームにも声をかけ、参加いただき、この地域での輪も広がりました。

横浜市では、認知症の人が安心して自分らしく暮らせる地域をめざす「チームオレンジ」が始まっています。私たち荏田地域ケアプラザも活動を開始し、2024年は、そのメンバーである地域住民の皆さまと共に参加させていただき、「アート+認知症」の取り組みへの理解も広がりました。これからも高齢や障害、認知症等になっても、普段の暮らしの中で、誰もが気軽に出かけられる場や支援の輪を広げていきたいと考えております。

GrASP株式会社 定政香織(作業療法士)

認知症を患うメンバー（通所利用者）に、美術鑑賞はどのような影響を与えるのか。当初、環境変化に敏感で混乱しやすいメンバーがいるため、参加することに不安がありましたが、結果は非常にポジティブなものでした。

普段閉じこもりがちなメンバーが感嘆の声を上げ、環境変化に適応が難しいメンバーも笑顔で現地職員の皆さんと接するなど、非言語的コミュニケーションが活発となっています。また、「絵が嫌い」というメンバーも参加を促した結果、予想以上に積極的な交流や笑顔が見られました。普段の日常生活では難しいと感じることも、美術鑑賞会を通じて残存能力を発揮し、前向きな行動につながる結果となりました。

鑑賞会に参加したご家族からは、社会性や興味関心がまだ残っていることや気分転換になったことが評価され、介護者にとっても休息の機会となるなど、お互いの心身機能面での活性化につながっています。

若年性認知症を患う方の活躍の場が少ない中、適切な支援があれば人との関わりを持ち、共に活動できることを実感しています。美術鑑賞会は、「認知症は高齢者だけが罹患するものではない」「認知症だから何もできない」という偏見を払拭する啓発にも繋がったのではないかと思います。

日常生活において困りごとがあっても、必要な支援を受けながら今まで通りの生活を続けられる社会が必要だと感じています。今回の経験を活かし、引き続き若年性認知症を患う方々の人生に寄り添っていききたいと思います。この度は貴重な機会をありがとうございました。

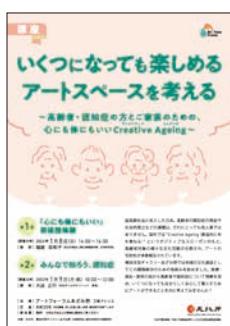
広報と参加者募集について

広報活動は、チラシの配布、ウェブページの作成、SNSでの発信を中心に行いました。2024年度は、アート+認知症のプログラム情報(募集を行わないアウトリーチを除く)を1枚のチラシにまとめることで、事業全体が立体的に見えるよう工夫しました。

しかし、認知症の方に直接情報を届けるのは難しく、近隣の福祉施設との連携が不可欠です。福祉施設が発行している広報物に情報を掲載してもらったり、利用者や関心のありそうな他の施設へ直接声をかけてもらうことで、認知症の方に情報を届けることができています。

また、横浜市芸術文化振興財団(P.09のTopics参照)の職員が鑑賞会のファシリテーターを行うため、このプログラムは職員研修の一環としての役割も担っています。施設の種類や役職を問わず、当財団から多様な職員が参加している点も特徴です。

■広報物一覧



2022年度チラシ



2023年度チラシ



2024年度チラシ

デザイン:伊藤浩平

■取組紹介動画



2022年度



2023年度

Topics

「認知症」の方を対象とすることの難しさ

本事業は、「アート+認知症」という名称を用いることで、どのような取り組みであるかを端的に伝えている。鑑賞会の対象者は高齢者や認知症の方、そのご家族や介護者としているが、特に初めての参加者にとっては、「自分がこのプログラムに参加しても良いのか」が分かりにくい場合があり、対象設定の難しさを感じる場面があった。また、高齢者の中には「認知症」という単語に敏感な方もいるため、鑑賞会当日は可能な限り「認知症」という言葉を使わないよう配慮している。代わりに、「認知症の方も一緒に楽しめる内容であること」や「脳のトレーニングとしても有効であること」を冒頭で伝えることで、私は認知症なんだと意識が向かないように心がけている。

やさしい美術鑑賞—易しさと優しさ。その先にあるもの—

三ツ木紀英 (NPO法人 芸術資源開発機構 代表理事)

「美術鑑賞」ときくと、多くの方々が居心地悪そうに「私は芸術はわからなくて」といった言葉を口にする。「やさしい美術鑑賞」は、作品の解説や情報の伝達を目的とせず、作品をみて感じたこと考えたことについて会話していく、コミュニケーションを目的とした営みだ。正しいことや知識ではなく、思いついたことを話すのであれば誰でも「易しく」参加出来る。

「やさしい美術鑑賞」で中島清之の《椿笑園の主達》¹をみた時のことを紹介しよう。作品の中の、居間らしき部屋に掛かる柱時計を指差し、「毎日時計を下ろして、手で巻くのが大変だったのよね」と幼い頃の記憶が語られることもあれば、向き合って座る2人の男女をみて、「夫が妻に何か小言を言っているのよ!」といった読み解きが飛び出し、ご家族の生活が感じられることもある。あるグループでは右下の犬を見つめ、「昔飼っていた愛犬によく似ていて」と、涙を流す方もいた。語り手の経験したことや思い出の断片、その方にとって大切な存在が喜怒哀楽と共に顕れる。作品を見て語ることとはこれまでの人生を思い出すことでもあり、その人自身を表現することでもある。同じ「やさしい美術鑑賞」でも日やグループによって賑やかであったり、静かにしみじみとしていたり様子は異なる。しかし、耳を傾け、笑い、「うんうん」とうなずきあう時間は、互いを手の平で温めあうような「優しさ」に満ちている。



鑑賞会を継続していると参加者に変化が生まれることがある。千葉県佐倉市の美術館ボランティアグループが、年間を通して高齢者施設を訪問し鑑賞会を開いていたときのエピソードだ。耳が遠くて聞こえないと言われていた方が、「〇さんは～と言っていたけど、私はこう思う」と話だし、補助がなくとも聞こえていることが判明したことがあった。会話に参加したいという意欲が、眠っていた身体機能を覚醒させたのであろうか。中には「これがないと生きていけない」と活動を切望する方もでてくるようになったという。好奇心を働かせ作品という未知の世界に自分を投じることは、幾つになってもうれしいのだろう。どのような表現も受け止められ、互いの優しさに触れる美術鑑賞は身体機能を改善し、その人の生きがいにすなりえる。

今世紀に入り欧米を中心に実践と研究が進み、アートがいかにして私たちの心身の健康と生活の質を高め、よりよいコミュニティを築いていくのかが、科学的根拠とともに示されるようになった。継続的な美術館訪問やアート表現活動が、人の喜びと自尊心を高め、幸福感をもたらす、社会的行動の促進につながるということが明らかにされつつある。しかしながら、日本の美術館ではまだまだ認知症の方にむけた取り組みは少ない。「やさしい美術鑑賞」は地道に地域の関係組織とつながり、市民を巻き込みながら、認知症の当事者と家族にむけたプログラムを実現させた、先駆的な事例の一つだ。まだ始まったばかりであるが、関係者や参加者の評判もよく、期待も高い。今後の展開に注目し、応援してゆきたい。

¹ 中島清之《椿笑園の主達》1970年(昭和45年)、紙本着色、横浜美術館蔵(中島清之氏寄贈)

認知症の方とその家族のQOLを高めるアート活動を推進する動きとは？

稲庭彩和子 (独立行政法人国立美術館 国立アートリサーチセンター 主任研究員)

「アート活動を通して認知症の方とその家族のQOLを高めよう」という取り組みは、主に欧米で2000年ごろから試みられてきました。認知症の方々と介護者の方が楽しめる「認知症フレンドリー」なプログラムは、現在ではシンガポールや台湾などアジア地域にも広がり常設プログラムとして取り組んでいる美術館も増えています。

では日本はどうでしょう？ 日本は世界で最も高齢化率が高く、認知症患者数においても世界で最も多い状況にあります。認知症に対応する美術館での取り組みはまだ数える程しかありません。この横浜市民ギャラリーあざみ野の3年間の活動は日本における先端的な事例であり、実践的な研修と出前プログラムまで行う内容の充実ぶりも目を見張るものがあります。

では、認知症に対応するアート活動がなぜ近年になり行われてきたのでしょうか。その背景として3つのことが挙げられます。1つ目が、アートや文化のようなクリエイティブな活動は、健康を維持し回復を早め、慢性疾患をケアし、生活の質を改善するのに役立つという数多くの研究結果がでてきたこと。2つ目が近年「健康」を左右する社会的な要因についての研究が進み、健康は個人の責任だけではなく社会の課題だと認識されてきたこと。その社会的要因のひとつは孤立であり、孤立は喫煙や飲酒よりも寿命に影響するとされ、孤立に対して医療・福祉の組織だけでなく組織横断的にパブリックセクターが対応していく必要性への認識が高まってきたこと。3つ目が超高齢社会になり認知症のような慢性疾患が増加していく中で、薬の処方だけではなく非医療的な対応が有効と考えられる場合は「社会的(文化的)処方」として地域の活動につなぐ視点がケアとして重要になってきたことです。

そうした近年の研究を踏まえた新たな社会のしくみづくりの政策提言として、例えば英国で提唱されている「クリエイティブ・ヘルス」があります。健康を生み出す社会の実現をめざし、従来の医療・福祉などの枠組みを超え、芸術や文化に関わる様々な組織で働く人々が連携し推進している事例が報告書¹に記載されています。アートや文化的活動を用いた当事者への介入が社会保障費などの低減や医療・福祉関係者の支援にもなると報告されており、21世紀のアートや美術館の潮流にも影響を与えています。

こうしたプログラムを推進するにあたり重要なポイントが3つあります。1つ目が地域の医療や福祉セクターとの連携。2つ目が対象を当事者だけでなく関係者(介護者と広くは周囲の人々)も含み、認知症への偏見などを解消していく研修等の取り組みを並行して行うこと。3つ目がこうした考えに基づく活動に市民が参加できる仕組みを作り、健康的なコミュニティを耕していくことです。この横浜市民ギャラリーあざみ野の活動もまさにそのポイントを押さえた活動になっており、今後の継続的な活動にも期待が高まります。

¹ 芸術・健康・ウェルビーイングに関する超党派議員連盟(英国)調査報告書
「クリエイティブ・ヘルス:健康とウェルビーイングに寄与する芸術活動(要約版)」<日本語版>
<https://ncar.artmuseums.go.jp/reports/learning/wellbeing/research/post2023-352.html>

選択肢をつくり、成熟を促すプログラム

北川裕介 (エドゥケーター／学芸員、横浜市民ギャラリーあざみ野)

美術館の役割

美術館が行う教育普及活動は、鑑賞や造形だけでなく、市民協働、インクルーシブ、ケアといった広範な領域に及びます。しかし、こうした活動において我々が担う役割は、まだ十分に認識されているとは言えません。そこで、本プログラムを公共の文化施設で実施する意義について、担当者の視点から整理をしてみます。

本プログラムの核となるのは、「成熟」と「選択肢」という2つのキーワードです（美術とケアの関係については、稲庭彩和子氏の寄稿文【p.29】をご参照ください）。具体的には、高齢者や認知症について知り、学び合う機会をつくり、あらゆる方々に「作品鑑賞を楽しむ」という選択肢を提供することを目指しています。

個人と社会、それぞれの成熟

ここでいう「成熟」は、個人と社会の両面から捉えることができます。それぞれの変化が重なり合いながら、より豊かな社会を形作っていきます。

個人の成熟は、学びを通じた行動や考え方の変化として実感しやすいものです。例えば、サポーター養成研修では、参加者が認知症の方と関わる機会を持ちます。認知症の方と接した経験があまりない参加者もいるなか、「研修を通じて自分の意識が変わった」「認知症の方に限らず、子どもやお年寄りへの声かけや対応の仕方に活かせると思った」といった変化に関する感想が毎年寄せられます。2023年度の講座で登壇いただいた上野優美先生は、「もし自分が認知症になったらと想像することが、ケアの第一歩」と語りました。この言葉が伝えるように、認知症を「自分ごと」として考えることは、視点を広げるきっかけになります。こうした個人の意識の変化こそが、認知症やケアについての理解を深めるためのスタートラインであることを示しています。

一方、社会の成熟は、個人の学びや意識の積み重ねによって少しずつ形作られていきます。その変化はすぐには実感しにくいかもしれませんが、異なる立場の人々の視点や知識が共有されることで、共感が生まれ、理解が深まり、次第に一体感が育まれていきます。例えば、講座の参加者からは「同じ境遇の方が多くいると知れてよかった。私だけかと思っていたので安心した」といった声が寄せられています。共通の経験を持つ人々が集うことで、孤独感が和らぎ、つながりが生まれる様子がうかがえます。また、この一体感は個人への影響にとどまらず、共有された経験や価値が場全体に浸透し、その場自体が特別な意味を持つようになります。つまり、「このような場が開かれた」という記憶が社会の中に刻まれ、積み重なっていくのです。こうした蓄積は、施設や制度といった社会の仕組みにも影響を及ぼすことがあります。認知症の方が安心して利用できる公共空間の整備や、ケアを支える地域ネットワークの強化など、支え合いの仕組みをより充実させる動きへとつながる可能性があります。当館も公共の文化施設として、こうした社会の変化を促し、支え合いの環境づくりに貢献していければと考えます。

選択肢としての鑑賞

美術館では、多くの高齢者が鑑賞を楽しんでいます。友人同士で語り合いながら作品を観たり、リラックスして過ごしたりする姿を日々目にします。しかし、福祉施設を日常的に利用されている方は、ぬりえや折り紙、ちぎり絵といった「つくる」活動には親しんでいても「鑑賞」する機会は限られています。そのため、作品を鑑賞する機会をもっと身近なものにするため、鑑賞を軸としたプログラムを行っています。

鑑賞は、観察力を養い、記憶や会話を引き出すきっかけになります。しかし、単に作品を提示し「観てください」と促すだけではなく、ご高齢の方と私たちが一緒に鑑賞をすることが肝要です。共に作品鑑賞を楽しむことで、私たち自身も彼らの深い洞察を通じて作品への理解を深め、新たな視点を得ることができ、双方が学び合う関係性を築くことができます。(三ツ木紀英氏の寄稿文【p.28】では、鑑賞がもたらすポジティブな効果について具体的な事例とともに述べられています。)

「つくること」と「みること」は、優劣をつけるものではなく、それぞれに固有の価値があります。重要なのは、一人ひとりに合った活動を選べる環境を整えることです。たとえ認知症が進行し、自分で選択することが難しくなったとしても、「つくること」と「みること」の両方の機会が保証されることが大切ではないでしょうか。

誰もが当事者となるプログラム

本プログラムは、認知症の方だけを対象とするものではありません。「ケアをする人」や「将来的に認知症になる可能性のある私」も含め、誰もが当事者となる取り組みです。ケアをする人もまた当事者であり、その負荷が特定の人に集中し疲弊しないよう、関わるすべての人が無理なく実施できる仕組みを整えることが、継続的なプログラム運営には欠かせません。高齢社会において「どのように豊かな老後を過ごせるか」は多くの人が関心を寄せるテーマです。老後のために貯蓄をしたり、趣味を持ったりすることも一つの備えかもしれません。しかし、それだけでなく、誰もが安心して暮らせる社会や活動を今から築いていくことこそ、より良い未来への準備となります。私たちが今日行う行動が、未来の成熟した社会を形作っていくのです。

謝 辞

本報告書の発行にあたり、ご協力いただいた
みなさまに心より感謝申し上げます。
(五十音順・敬称略)

稲庭彩和子

定政香織

發知言織

三ツ木紀英

吉村陽子

和久井聡子

GrASP 株式会社

NPO法人 芸術資源開発機構 (ARDA)

横浜市荏田地域ケアプラザ

ゆい青葉 (荏田)

リハビリホームグランドあざみ野

本事業を担当した横浜市民ギャラリーあざみ野職員
岡崎智美(2022年度)、北川裕介(2023、2024年度)

令和6年度障害者等による文化芸術活動推進事業
アート+認知症 やさしい美術鑑賞プログラム
2022.4→2025.3報告書

発 行 横浜市民ギャラリーあざみ野(公益財団法人横浜市芸術文化振興財団)
〒225-0012 横浜市青葉区あざみ野南1-17-3 アートフォーラムあざみ野内
TEL:045-910-5656
<https://artazamino.jp/>

編 集 北川裕介、太田雅子
デザイン 株式会社 野毛印刷社
印 刷

主 催 文化庁、横浜市民ギャラリーあざみ野(公益財団法人横浜市芸術文化振興財団)
協 力 やさしい街あざみ野実行委員会



2025年3月発行
©2025 Yokohama Civic Art Gallery Azamino

